



会長 畑 中 信 一

(平成3～4年度)

### 会 長 就 任 に あ た っ て

この度、日本菌学会が創立35周年を迎え、去る5月末日、千葉大学において記念大会を成功裡に終えたことは、皆様御承知のことと思います。35年前、僅か50名の会員で出発した本学会は20周年記念大会時には950名、それからさらに15年を経た今日、実に1,380名の会員を擁する、わが国中堅の学会に成長いたしました。

日本菌学会ニュースの最新号には前期の役員の方々によって収集、整理された各種の資料が掲載されており、本学会35年の歩みをつぶさに見ることが出来ます。加えて、学会創立に向けて直接御尽力なされたお一人である印東弘玄先生が学会創立前夜とでもいうべき緊張した数年間の状況を臨場感溢れる記事として寄稿しておられます。創立に携わった先生方の御努力には、あらためて敬意を覚えざるをえません。

15年前、日本菌学会は創立20周年のお祝いをいたしました。先日、当時の講演要旨集をめくってみました。それから15年経った今日まで、当然のこととはいえ、学会内外におこった状況の変化には著しいものがあったことを強く感じました。第一に研究者人口と研究対象の著しい増大と拡張が挙げられます。また近年、官公庁並びに私企業の研究所からも多くの優れた業績が報告されている事実は、菌類の具体的な研究が各方面で社会的にも要請されていることの反映であるように思います。第二に感じましたことは、研究方法が多面化し、一つの研究対象にも様々な手法が、従来よりも、いわば当然のこととして盛んに用いられる傾向が強くなったということです。例えば系統分類学は基本的には形態学に基礎をおきつつも、以前に増して、細胞生物学、生態学、発生学、分布論、化学成分の分析から、最近では分子生物学の手法までが総合的に駆使され、名実共に生物学の最も重要な基礎として意欲的な若い人達にとって再び魅力のある分野になった様に思われます。第三には、分子生物学並びに生物工学の広範囲にわたる導入が挙げられます。この傾向も生物学の他の分野同様、今後加速され続けることは間違いないことであり、これ以上説明を加える必要はないと思います。

このような状況を考えますと、日本菌学会の役割は、学問的にも社会的にも益々重大になったと言わざるをえません。本学会は、あたかも、成人式をすませて一人立ちを始めた一人の人間が様々な経験と実績を蓄積して壮年に達し、今まさに大きく飛躍しようとしているのに似ているように思われます。また、そうでなければならぬものと考えます。1982年、第3回国際菌学会議を日本で成功させた事は、その実績の最たるものとして、私達の記憶にまだ新しいところであります。昨年、Regensburgで開催された第4回国際菌学会議に参加されたわが国の若手研究者に、第3回の東京大会での学問上の経験が立派に生かされていた実例を私自身実見することができ、大変嬉しく、また、頼もしく思いました。

御承知のように、本学会の会員は出身が様々であり、本業は菌学以外の分野である方も大勢いらっしゃいます。加えて、直接・間接に菌学に関する研究あるいは業務を職業とする方々とそうでない方々とで構成されております。私はこの事実こそ本学会の大きな特色であり、新しいものを生み出す大きな原動力になるものと期待しております。

あたかも35周年に時期をあわせたかの様に、前期および前々期の執行部の御努力で、本学会の会則が大幅に改正されました。したがって、今期はこれを円滑に運用する責務を負っております。さらに特筆すべき事は、昨年度から若手の研究者を対象として菌学研究奨励賞の制度が設けられた事です。どうか、今後積極的に御応募いただき、この制度を有意義なものとして育てて下さるよう、私からも切にお願い申し上げます。

申し上げるまでもなく、「日本菌学会会報」の発行は本学会の最も重要な業務であります。前期編集委員長の御努力の賜と存じますが、会員の皆様の御投稿が最近富に活発になったと承り、喜ばしく思っております。今後とも一層、本誌をもりたてて下さいますよう御協力をお願いいたします。また、特に今期は国際的な協力と内容の一層の充実、水準の向上を期し、編集委員長の御協力、カナダから R. J. BANDONI 教授、ドイツから F. OBERWINKLER 教授のお2人に編集委員に加わっていただくことになりました。一方、「日本菌学会ニュース」は掲載記事が益々多彩化、充実し、重要な情報源として広い読者層に好評と伺っております。「日本菌学会会報」同様、編集には担当の方々に献身的な御苦勞をおかけしておりますが、会員の皆様におかれましても格別の御理解と御支援をお願いいたします。

1993年夏、第15回国際植物学会議が日本で開催されることになっております。この会議には私達は重大な関心を持ち、関連諸学会と連携しつつ、可能な限り協力をしなければならないと考えております。

最後になりましたが、昨年暮れの役員選挙で会長に選出されましたことは、私にとりまして身に余る光栄と有難く存じております。只、何分にも浅学非才の身でありますので、この上は役員、幹事の方々は勿論、会員の皆様御一人御一人の御力添えをいただき、責務を全うしたいと存じておりますので、御協力を切にお願い申し上げます。